藤巻　公裕　教授

埼玉大学紀要　教育学部，56(1)：133～141 (2007)

藤巻公裕教授の人と業績

野瀬　清喜*

藤巻公裕先生は1941（昭和16）年12月８日、青森市に生まれました。12月８日といいますと第二次世界大戦（太平洋戦争）の開戦の日ですが、当時の世相を反映してか、男子が生まれたというので地元の新聞に記事が載ったと聞いています。

北国で冬の遊びといえばスキー、スケート。スキーは大鰐スキー場に行ったり、近くの小高い山に仲間とよく出かけたそうです。近くの小高い山とは今の三内丸山遺跡付近で、この近辺はお椀を臥せたような小山がいくつかあって、子どもにとっては程よい滑走斜面だったようです。その下に国内最大級の縄文集落があったことを今となって知って驚いたそうですが、当時から土器の破片や鏃がよく出土していたので菓子箱に入れて土器収集もよくしていたとのことです。

1961（昭和36）年先生は東北大学に進学することになりますが、運動部員勧誘では迷わずスキー部に入部の手続きをしたそうです。スキー部の主な練習は山形蔵王スキー場。合宿に入るとまずは調子を出すために滑降練習。飛ばしに飛ばし、スピードはいくら出しても怖くなかったといい、ある時、“あんた、大平コースで火花を飛ばして滑っていたよ。スキー部ってすごいなあ”と言われたことがあったそうです。コースの所々に岩が露出していて、夕暮れ近く中央ゲレンデでの練習の帰り、下まで何分で下りてこられるかを部員同士で競って滑降したときのことだったようです。

当時の大会はインカレ、東北インカレ、七帝戦（旧七帝大間の大会）などがあったようですが、インカレは３部制。第１部は日大、芝工大、明大など私学のスキーの名門。ほとんどの国立大学は第３部で競い合ったのだそうです。名門大学は伝統を守り、優れた選手を集めて優勝を目指すが、国立大学はそれはできないため、入部希望者は絶対に断らないで、入部した翌日からすぐ選手に仕立て上げる作業にかかったそうです。それは新入生歓迎合宿。残雪の月山がいつも会場で、先生は自分の練習の旁ら、ハの字型で滑る新入部員を一気にクリスチャニアターンにまで高める係をよく務めたとのことです。さて、藤巻先生は運動心理学を研究なさってきましたが、運動心理学の道に入った理由を尋ねましたら、次のようなことが返ってきました。

一般心理学の講義で夏休みの宿題が出て、夜自室で60Wの電球を灯して凝視する残像実験を行いレポートを提出したら、90点がついて戻ってきたのが１つのきっかけであろうと述懐しています。点数もさることながら自分の行った実験をきちんと認めてもらえたということがとても嬉しかったといいます。

いっぽう、体育専門の講義は教授が読み上げる講義内容をひたすら筆記する時間だったといい、「たいいくとはしんたいをとおしてのきょういくである　まる　また　てん　こころとからだをわけてのべるものがいるが　てん　こころとからだはいったいでありきりはなしてかんがえられるものではない　まる　これをしんしんいちじょという　まる」と読み上げるのを「体育とは身体を通しての教育である。また、心と

*　埼玉大学教育学部保健体育講座

体を分けて述べる者がいるが、心と体は一体であり切り離して考えられるものではない。これを心身一如という。」とノートするのだそうです。読み上げが始まって「おまえ達、しんしんはどう書いた？　心身ではなく、身心だぞ」などとちょっとだけ板書・解説が入り20～30分経つと「今日はこれまで！」と授業時間はやたら短かくもの足りなかったそうです。

そうこうしているある時、スキー部のコンパのチラシをスキー部長に持って行ってこいとキャプテンから仰せつかり、部長の北村仁教授（現東北大学名誉教授）の研究室を訪ねたら、教授曰く、「コンパは分かった、オレ出席。ところでおまえ達勉強しているか？」「ええ、まあそのー。でも専門の講義はちょっと物足りなくて……」「そうか、わかった。じゃあ、オレがやってやる。週１回夜オレの家に来い。」これが体育の理論と心理学の勉強を始める大きなきっかけになったとのことです。北村教授は東京高等師範学校体育科、東京文理科大学心理学科ご卒業で、当時は教養部で一般体育を担当なさっていたので教育学部保健体育学科とは別組織の先生なのだそうですが、志のある学生には時間を割いて特別に指導してくれたようです。

この後先生は北村教授から「東京教育大学に体育の大学院ができるからそこにいけ」と勧められ、本人は大学院など高嶺の花、実力不相応と躊躇したが、意を決して進学することにしたそうです。

修士論文は肥満児に関する心理学的研究ですが、それまでの我が国では子どもの肥満はあまり問題とされなかったのですが、目立って増えてきて問題視され始めたため、心理学の立場から研究しようとしたのだそうです。

1968（昭和43）年修士課程を修了し、東京工業大学に勤務することになりますが、この大学で先生は大学紛争に会っています。そもそもの発端は東大医学部の学生処分問題に端を発したようですが、騒ぎがエスカレートするうちに東京工大も闘争の拠点となり、ゲバ棒をもって迫ってくる学生に研究室を乗っ取られてしまったそうです。

先生は比較的早くからコンピュータを手がけていますが、それは東京工大にいたのが幸いし、以後データ処理はもっぱらコンピュータで行うようになります。東京工大では大型電子計算機が自由に使える環境にあり、当時はカードによるバッチ処理方式でしたので、授業に行く前に計算機にかけ、帰ってきたときには結果が出ている、の繰り返しをしていたそうです。

藤巻先生は1976（昭和51）年に埼玉大学に赴任いたしました。コンピュータの話の続きでいえば本学に来て比較的早くパーソナルコンピュータを使い始めております。その頃はパソコンは普及するのかそのまま廃れるのかの岐路に立っていた時期だったといいます。デスプレイ、CPU、プリンタ一式で150万円で購入したそうです。当時はプログラムを組むのに多くの時間を費やしたそうですが、その後パソコンは急速に普及し、スピード、容量ともに格段の飛躍を遂げ、いまやソフトも充実して値段も下がり、隔世の感があると述べておられます。

本学に赴任されて学部の授業では体育心理学、体育測定評価、体育概説、体育科指導法（教材研究）などを担当されました。学生の研究室所属では先生の研究室所属希望者が多く、中にはわざわざ専修替えをして先生の研究室に入った学生も数名いました。本講座の卒業研究発表会は例年整然、盛大に行われておりますが、先生が赴任なさった当時、学生の研究室所属は限られた教官にしかつけなかったり、発表のしかたもバラバラだったりして指導体制がいびつだったようで、それを改め、現在のような所属体制、発表会になったのは先生のご尽力が相当大きかったと聞いています。また先生はデータ処理やコンピュータに詳しいこともあって多くの学生が分野を超えて相談に行っておりました。

1990（平成２）年、教育学部に修士課程が創設されましたが、先生は体育学特論（運動発達論）、体育学演習（体育心理学）を担当しながら、

修士論文作成の指導に当たり、現職教員も含め優れた修了生を多く世に送り出しました。そして1997（平成９）年には東京学芸大学連合学校教育学研究科が発足しましたが、そこでは体育科教育内容基礎研究「目標・内容支援研究２」（運動の心理学的研究）を担当され、現在は主指導教員として２名の学生に博士論文作成の指導をして今日に至っております。

先生は本学に着任してまもなく大学の地域貢献を目指して公開講座「肥満児教室」を開催しておりますが、これは東京工大におられたときから続けたものだと伺いました。やがてその名称は「運動のにがてな子の体育教室」に変わるのですが、通算すると15年以上続けたことになるそうです。 この教室では単に運動のできない子をできるようにするという実技指導だけでなく、生育歴、家庭環境、保護者への指導、教育相談、カウンセリングを含めて行ったものであり、全国的にみても大変ユニークなものでした。通常の授業の他に週1，2回のペースで行っていたわけですから、相当な負担だったと思われますが、先生は「体育、スポーツ界ではとかくエリートやできる子に目を向けがちであるが、教育はそれだけではない。将来のどんな宝が潜んでいるか分からない。」ということが頭にあったのだそうです。

先生は講義、演習、学生の教育指導を熱心に進める一方、教務委員会、教育実習委員会、総務委員会、将来構想委員会など多くの委員、時には委員長も務められ、この方面でも多大な貢献をされました。特に将来構想委員会では教育体制改革の案作りや教員需要減にともなう危機的な状況を迎えたときには統計的手法を使って将来の埼玉県教員需要の予測をするなど、改革のための基礎資料作りに心血を注いだようです。1989年頃のことだそうです。

その後も今日に至るまで教育学部は常に激動の波にさらされて来ましたが、教員養成の特化に絞った教育学部の成功と発展を陰ながら期待しているとのことでした。

教育メデア実習室も先生を抜きにしては語れないものがあります。世の中が情報化社会を迎えつつある時、教員養成においても必ずや近い将来コンピュータ教育が必要になるということを見通して学部内の有志が集まって構想が練られたようです。教育メデア実習室の創設に当たっては先生は構想案作りに参画しながら下働きもいとわず、11時、12時は序の口、没頭しているうちに時間の経つのも忘れて明け方４時頃帰宅したことが幾度もあったそうです。 先生のいろんなお話を聞いていると、仕事に関しては自分のことを犠牲にしてでも学部、学科の仕事を進めて来た姿が浮かんで参ります。

先生の仕事の進め方は十分な下調べをした上で着実に進めるということでしょう。先生が委員長を引き受けて委員会案を教授会に提案するときには常に80％以上の確率で通すつもりで提案していたと述懐しておられます。

先生は附属養護学校長と附属実践センター長を兼任なさいました。実践センター長に就任した当時、折角敷地内にありながら付属小と交流の少ないことに気づき、風通しをよくするため用事を作っては訪問し、また先生方にセンターに来てもらうようにしたそうです。先生は「そんなことぐらいしかできなかったから」といいますが、私からみればたいへん大事なことのように思いました。

附属養護学校長に就任した時も、先生は附属と教育学部に距離、わだかまりのあることを感じたようで、それを埋めるために講座を問わず附属養護への訪問を働きかけ、敢えて学校内で学生の演習授業をしてもらったこともあったそうです。

先生は1991（平成３）年に在外研究員としてアメリカ合衆国オレゴン州ウェスタンオレゴン州立大学に行かれました。現在、本学教育学部と姉妹提携している大学です。教育学部と人文科学部の２学部からなる小規模の大学ですが、キャンパスは広く一面芝生で、子どもの屋外運動にはもってこいの場所が至るところにあり、

運動のにがてな子には最適な場所がいっぱいありますねと言ったら、体育の学生もいるから手伝ってもらい、是非やってみてはどうかと、話を持ちかけられたこともあったそうです。

先生は課外活動では今日までスキー部長をなさっておられますが、スキーシーズンはちょうどセンター試験、本学や連合大学院の入学試験、卒論・修論の指導、期末試験などと重なってとても合宿や大会会場には駆けつけられないため、たまに練習メニューを書き、アドバイスするぐらいで終わりとても残念がっておられました。

先生が語る埼玉大学30年のお話は尽きることはないのですが、紙数の関係で割愛せざるを得ません。先生におかれましては今後とも健康に十分留意され、ますますのご活躍をお祈り致しております。

2006年10月記

略　　歴

氏　　名　藤巻公裕
生年月日　1941年12月８日
住　　所　さいたま市大宮区大成町２－326

学　　歴

1965年３月　東北大学教育学部学校教育学科卒業
1966年４月　東京教育大学大学院体育学研究科体育学専攻入学
1968年３月　同上修了
1968年３月　体育学修士（東京教育大学）

職　　歴

1965年４月　宮城県立若柳高等学校教諭
1968年７月　東京教育大学体育学部体育心理学研究室教務補佐員
1968年10月　東京工業大学助手工学部
1976年４月　埼玉大学講師教育学部
1978年８月　同上助教授教育学部
1988年４月　同上教授教育学部（現在に至る）
1990年４月　埼玉大学大学院教育学研究科教科教育学担当（現在に至る）
1991年４月　文部省在外研修（アメリカ合衆国オレゴン州ウェスタンオレゴン州立大学、オタワ大学、1992年３月まで）
1994年４月　埼玉大学教育実践研究指導センター長併任（1998年３月まで）
1996年４月　東京学芸大学連合学校教育学研究科併任（現在に至る）
1999年４月　埼玉大学教育学部附属養護学校長併任（2002年３月まで）

所属学会等

1967年４月　日本体育学会（現在に至る）
1968年４月　日本教育心理学会（現在に至る）
1968年４月　日本心理学会（現在に至る）
1973年９月　日本保育学会（現在に至る）
1974年４月　東京体育学会（現在に至る
1976年４月　国際スポーツ心理学会（2001年まで）
1976年４月　日本スポーツ心理学会（2001年まで）
1983年４月　埼玉県教育委員会家庭教育相談事業委員会（1994年３月まで）
1986年４月　埼玉県家庭教育振興協議会理事（現在に至る）
1987年４月　日本体育協会スポーツ科学委員会（1989年３月まで）
1988年９月　日本健康心理学会（現在に至る）
1989年４月　日本オリンピック委員会スポーツカウンセラー（1999年３月まで）
1998年４月　埼玉県子育てアドバイザー（現在に至る）

2000年４月　　全国国立附属学校連盟理事（2001年３月まで）

研究業績

Ⅰ　著書

1. 肥満児の管理と指導（共著）、9.肥満児の心と学業、67-73頁、1970年３月、神奈川県教育委員会
2. 非行化傾向の診断と指導（共著）、六田研・DATによる予測、68-84頁、1971年10月、明治図書
3. 非行化傾向の診断と指導（共著）、七 グリュックの方法による予測、84-93頁、 1971年10月、明治図書
4. 現代学校体育大事典（共著）、Ⅷ 特別な問題を持つ児童生徒の体育指導、194-196頁、199-201頁、1973年６月、大修館
5. 運動心理学入門（共著）、第５章　運動と発達、4.発達加速化現象、188-19　3頁、1976年１月、大修館書店
6. 体育科教育の研究（共著）、第２章 教科体育の指導、5.体育の評価法、168-185頁、1979年10月、建帛社
7. 心理検査Ｑ＆Ａ（共著）、Ⅲ.特殊知的能力検査、Ａ.乳幼児期発達検査法、84-94頁、1980年６月、田研出版
8. スポーツ心理学Ｑ＆Ａ（共著）、61 あがりやすい人とはどのような人か。また、あがらないためにはどんなトレーニングが必要か。134-135頁、1984年１月、不昧堂
9. 新版運動心理学入門・（共著）、第５章 運動の発達、５ 発達加速化現象、108-113頁、1987年２月、大修館書店
10. 21世紀へ向けての家庭教育－たくましい３才児－（共著）、身体・運動の発達、26-29頁、122-123頁、136-141頁、1987年３月、埼玉県教育委員会
11. たくましい３歳児（共著）、13 けが・事故防止、20 遊び方乱暴、21 運動　遊びの相手、22 運動能力30-31頁、44-49頁、1987年７月、埼玉県教育委員会
12. 学校体育用語事典（共著）、サイバネティクス、124頁、システム論、132頁 、成就尺度、158-159頁 、情報処理、160-161頁 、情報理論、174-175頁 、スキルテスト、242-243頁 、体力の診断、260-261頁 、統　計パッケージソフト、274頁 、ハードウェアとソフトウェア、276頁 、ハイテクスポーツ、302頁、フローチャート、321-322頁、モデル、1988年６月、大修館書店
13. 体育心理学（共著）、第６章 体育活動と発達、第１節 身体・運動の発達と要因、67-76頁、第２節身体的機能の発達、76-89頁、第11章 体育と精神衛生、第２節 体育・スポーツの場と適応、201-214頁、1989年４月、建帛社
14. のびゆく３歳（共著）、第１章 からだと健康、４-11頁、1990年３月、埼玉県教育委員会
15. 保育内容健康（共著）、第７章 領域「健康」における指導上の問題点、4.安全指導、176-184頁、1990年６月、ミネルヴァ書房
16. 教育情報学入門（共著）、15章 体育科におけるコンピューター利用法、187-196頁、1993年１月、培風館
17. 新・保育講座 保育内容「健康」（共著）、第７章 領域「健康」における指導上の問題点、５安全指導、98-207頁、1990年６月
18. コーチングの心理Ｑ＆Ａ（共著）、Ｑ13. なぜ選手はやる気をなくするのでしょうか。意欲をな

くした選手にの指導はどのようにすればよいのでしょうか。38-39頁、1998年11月、不昧堂
19. 体育授業の心理学（共著）、第３章「生きる力」と体育学習、２ 運動不振児の指導、124-130頁、2002年３月、大修館書店

Ⅱ　学術論文

1. 肥満児に関する心理学的研究〔修士論文〕、1968年２月
2. 肥満児の心理（共著）、体育の科学、第18巻４号、224-249頁、1968年　４月
3. 肥満児に関する心理学的考察（共著）、体育学研究、第12巻、５号、255頁、1968年11月
4. 肥満児に関する心理学的研究Ⅱ（共著）、体育学研究、第13巻、５号、441頁、1969年７月
5. 肥満児に関する心理学的研究Ⅲ（共著）、体育学研究、第14巻、５号、402頁、1970年７月
6. 肥満児に関する心理学的研究Ⅳ（共著）、体育学研究、第15巻、５号、306頁、1971年７月
7. 肥満幼児に関する心理学的研究－第１報 その実態および運動能力と知能について－、福岡大学体育学部紀要、第３巻、１・２号、１-９頁、1973年３月
8. 幼児、児童、生徒の身体運動能力の発達に関する研究（共著）、教育発達に関する調査研究報告書、Ⅲ.身体、運動能力発達の年次推移および地域差に関する文献の概観、1.発達加速化現象の意味、2.年間加速化現象、16-30頁、1973年３月
9. 子どもの肥満と運動（単著）、国立競技場、第176号、２-３頁、1973年６月
10. 体力テストの内容と方法（単著）、教育心理研究、第53号、77-81頁、1973年８月
11. 幼児、児童、生徒の身体・運動能力の発達に関する研究報告書（共著）、教育開発に関する調査研究、1974年８月
12. 13年間における社会成熟度の発達に関する研究（単著）、現代教育心理、第１集、143-151頁、1974年４月
13. 幼児・児童・生徒の発達課題に関する研究（共著）Ⅲ.社会性における発達課題、２.社会的発達の成熟からみた発達課題、教育研究に関する調査研究、1975年３月
14. いわゆる幼児学校のあるべき教育機能等に関する調査研究、文部省委託研究報告書、1976年３月
15. 低学年における発達検査とその利用（単著）、現代教育心理、第５集、150-１55頁、1976年８月
16. 肥満に対する心理学的アプローチ（共著）、第Ⅰ章　肥満とは何か埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第25巻、21-39頁、1977年３月
17. 心身の発達における認知差Ⅰ－社会的成熟について－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第26巻、30-43頁、1977年10月
18. 子どもの心身発達のとらえ方（単著）、学級経営、140号、115-122頁、1977年12月
19. 健康開発システムの研究－コンピュータによる体調診断と運動処方のプログラム－（共著）、東京工業大学論叢、第３巻、75-96頁、1978年１月
21. 心身の発達における認知差Ⅱ、－運動行動について－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第27巻、59-76頁、1978年３月
22. 肥満者のエネルギー消費に関する研究（共著）、第２章　青年期後期の肥満に関する実態分析、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第27巻、85-103頁、1978年３月
23. 発達加速化現象と肥満（単著）、埼玉大学電子計算機センターニュース、７-11頁、1979年３月
24. 肥満者の運動生活と身体認識に関する研究（共著）、Ⅱ.肥満者の身体意識、埼玉大学紀要（教

育学部）教育科学Ⅰ、第28巻、59－76頁、1979年10月

25. 肥満者の運動機能と行動療法（共著）、第３章 肥満者の運動意識に関する研究、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第29巻、123-141頁、1980年３月
26. 児童生徒の知的能力の構造とその発達的変化に関する分析的研究（共著）、第２章　児童生徒の知的能力の構造とその発達的変化、第１節　幼児の知的能力の構造、昭和55年度科学研究費（総合研究）、1981年３月
27. 小学校児童の体力、運動技能の発達過程と運動学習の評価に関する研究（共著）、Ⅱ．児童の体力・運動技能の発達に関する研究その１、埼玉大学教育学部保健体育学科、1981年３月
28. 幼児期における運動技能の因子構造について－教師からみた場合－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第31巻 、109-116頁、1981年３月
29. 体育不振児の学業成績（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第31巻、 62-72頁、1982年10月
30. 低学力児の要因分析と治療的指導の方法に関する研究（共著）、第５章運動技能低位児の要因分析とその指導法、昭和57年度科学研究費（総合研究Ａ）の報告 、34-46頁、1983年３月
31. 子どもを運動嫌いにする背景（単著）、体育科教育、第31巻、第５号、22-２５頁、1983年５月
32. 発達段階からみた望ましい運動とは（単著）、体育科教育、第36巻、 第11号、16-18頁 、1983年９月
33. 運動の不得意児童の原因帰属（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅱ、第32巻、85-96頁、1983年10月
34. 体育授業で子どもを変えるポイント（単著）、体育科教育、第32巻、第４号、18-20頁、1984年４月
35. 運動の得意な児童の原因帰属（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ増刊、第33巻、215-222頁、1984年10月
36. スポーツマンの精神力に関する研究－高競技力者の精神的特徴について－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ増刊、 第33巻、205-214頁、1984年10月
37. 教育学部における実験・実技系教育教材の視覚化・聴覚化による教育方法の改善（共著）、6．体育教材のビデオ化による指導効果、38-47頁、埼玉大学教育学部、1986年３月
38. 低運動技能者の体育指導（単著）、体育科教育（増刊号）、第33巻、第11号、67-88頁、1986年３月
39. スポーツマンの精神力に関する研究Ⅱ－因子構造－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学　Ⅲ、第34巻、63-71頁、1986年６月
40. 運動恐怖感に関する研究Ⅰ－因子構造について－（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第35巻、99-103頁、1986年６月
41. 教育情報処理プロジェクト（共著）、埼玉大学教育学部教育情報処理研究グループ、1987年３月
42. 運動恐怖感に関する研究Ⅱ（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ増刊、第36巻、67-73頁、1987年７月
43. 教育情報処理に関する研究Ⅰ－「教育情報処理研究」受講生の講義に伴う意識変化－（共著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第36巻、89-99頁、1987年７月
44. スポーツ選手のメンタルマネジメントに関する研究（第３報）(共著)、Ⅳオリンピック強化指定選手の心理的調査分析、108-115頁、日本体育協会スポーツ科学委員会、1988年３月

45. 地域スポーツクラブの活動実態及びスポーツ指導者の意識（共著）、埼玉県スポーツ研修センター、1988年３月
46. 心身のたくましさと運動指導（単著）、埼玉教育、第42巻、第10号、1988年10月
47. スポーツ選手の競技行動における性差（単著）、スポーツ心理学研究、第15巻、第１号、5-12頁、1989年３月
48. 運動不振児の運動発達過程（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅱ、第38巻、１号、73-82頁、1989年３月
49. スポーツ選手のメンタルマネジメントに関する研究－第４報－（共著）、Ⅵ ソウルオリッピック出場選手の心理調査分析、74-95頁、日本体育協会スポーツ科学委員会、1989年３月
50. オリンピック選手制度（昭和62-63年度）報告書（共著）、オリンピック強化選手心理調査の結果について、81-84頁、日本体育協会スポーツ科学委員会、1989年３月
51. 幼児の連続跳躍過程と動作エラーについて（単著）、体育学研究、第34巻、第２号、167-174頁、1989年９月
52. 運動恐怖感に関する研究３（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第40巻、第１号、47-60頁、1989年３月
53. 運動不振児の運動発達過程２（単著）、埼玉大学紀要（教育学部）教育科学Ⅰ、第42巻、47-52頁、1991年３月
54. 中学校における走り幅跳び指導に関する実践的研究１（共著）、埼玉大学教育実践　研究指導センター紀要、９号、39-46頁、1996年３月
55. 体育に対する態度の変化について（単著）、埼玉大学紀要(教育学部)教育科学Ⅰ 第46巻、第１号、47-54頁、1997年３月
56. 運動技能の測定に関する研究Ⅰ－技能の構造と信頼性、妥当性について－（単著）、埼玉大学教育実践研究指導センター紀要、第11号、21-32頁、1998年３月
57. 体育学習における友人関係の変化に関する研究１（共著）、埼玉大学教育実践研究指導センター紀要、第11号、33-41頁、1998年３月
58. 気づき、自ら取り組み、生活に活かす子をめざして（共著）、究集録29、埼玉大学教育学部付属養護学校、2000年２月
59. 気づき、自ら取り組み、生活に活かす子をめざして（共著）、研究集録30、埼玉大学教育学部付属養護学校、2001年２月
60. 小学生の運動不振スクリーニングテストについて（単著）、埼玉大学紀要教育学部（教育科学Ⅱ）第51巻第１号59-68頁、2001年10月
61. 小学生の運動恐怖感に関する研究（単著）、児童学研究、第81巻、11-20頁、2002年６月
62. 体育科における学習意欲に関する実践的研究１（共著）、埼玉大学教育学部教育実践総合センター 紀要、第３号、2004年３月
63. 小学校水泳学習における子どもとのかかわり合いに関する研究（共著）、埼玉大学紀要教育学部（教育科学Ⅱ）、第53巻、第１号、2004年３月
64. 体育における「目標にとらわれない評価」の実践可能性（共著）、学校教育学研究論集、第10号、2004年10月